様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成　25 年　4 月　1 日現在

機関番号：１２５０１
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2010～2012
課題番号：２２５３０９５３
研究課題名（和文）　小学校国語科入門教材の歴史と展望
研究課題名（英文）　History of teaching materials for Literacy Education of the Early Elementary School, and Its Future Prospects
研究代表者
首藤　久義（SHUTO HISAYOSHI）
千葉大学・教育学部・教授
研究者番号：２０１１３８９７

研究成果の概要（和文）：小学校国語教科書入門教材の歴史について、資料の発掘・整理・比較・考察を通して従来の認識を確認・訂正し、欧米からの影響関係を明らかにして、明治初期から現代にいたるまでのより正確で詳細な変遷を明らかにし、その研究成果を踏まえて今後の方向を展望した。特に日本最初のセンテンスメソッド教科書『小学国語読本』（通称「サクラ読本」）に多大な影響を与えたドイツの『ハンザフィーベル』を徹底調査することによって旧説を訂正するとともに「サクラ読本」出現の歴史的意義を明らかにした。以上を踏まえて、言語生活向上につながる言語活動教材を一層充実させることが、教科書入門教材が今後進むべき方向であることを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：I clarified the history of the introductory material of elementary school language textbooks. In particular, I clarified the historical significance of the “Shogaku Kokugo Tokuhon”（aka Sakura Tokuhon）which adopted sentence-method as the first time in Japan. This textbook was much influenced by German “Hansa-fibel”. By thorough investigation of it I corrected some wrong information which has been existed in this research field. I made it clear, based on this historical research, that we should promote further enhance of the teaching materials for language activities to enrich our language lives.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２０１０年度	1,000,000	300,000	1,300,000
２０１１年度	700,000	210,000	910,000
２０１２年度	800,000	240,000	1,040,000
総計	1,500,000	750,000	3,250,000

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：教育学・教科教育学
キーワード：小学校国語入門教科書・ハンザフィーベル・『小学国語読本』（「サクラ読本」）・井上赳・オットー＝ツィマーマン・センテンスメソッド・教材・歴史

１．研究開始当初の背景

（1）明治以降現代までの小学校国語教科書入門教材の歴史研究はこれまでもなされてきており、研究代表者はその方面の第一人者であったが、不明の部分や未研究の部分、解決すべき課題が残されていた。

（2）特に、日本の小学校国語科入門教材の歴史上画期的な意義を持つ『小学国語読本』（通称「サクラ読本」：以後、「サクラ読本」と称する。）については、ドイツの『ハンザフィーベル』から決定的な影響を受けていることが当事者井上赳によって証言されていたが、『ハンザフィーベル』と「サクラ読本」との関係を、現地調査と資料収集に基づいて、確認・考察した研究成果の発表はなされていなかった。

（3）日本の小学校国語入門教科書の通史的研究を踏まえて今後の方向を展望した研究発表はなされていなかった。

２．研究の目的

（1）小学校国語教科書の入門教材の歴史と現状を明らかにする。

（2）欧米からの影響関係の調査・考察、とりわけ、日本初のセンテンスメソッド教科書である「サクラ読本」に決定的影響を与えたドイツの『ハンザフィーベル』の徹底調査に基づく考察によって、「サクラ読本」出現の歴史的意義を明らかにする。

（3）その研究を踏まえて、今後の進むべき方向を明らかにする。

３．研究の方法

（1）明治以後、現代までの小学校国語教科書入門教材を通覧してその変遷を明らかにする。

（2）日本の教科書編集に影響を与えた可能性がある欧米の教科書についての調査・考察、とりわけ、ドイツの『ハンザフィーベル』の現地徹底調査を踏まえてその全容を明らかにし、「サクラ読本」と比較考察する。

（3）「サクラ読本」出現という小学校国語科入門教材の歴史における画期的な出来事の背景とその後の教科書編集に与えた影響を明らかにする。

（4）以上の歴史的考察を踏まえて今後の進むべき方向を展望する。

４．研究成果

（1）欧米の教科書からの影響を受けながら、日本語と日本文化の特性にふさわしい方法を模索しつ小学校国語教科書入門教材が編集されてきた歴史についての知見をより正確で詳細で豊富なものにした。

（2）ドイツの教科書『ハンザフィーベル』の全容を現地調査によって明らかにし、「サクラ読本」との比較考察を行ってその関係を明らかにした。

（3）「サクラ読本」の出現が、小学校国語教科書入門教材に新境地を開いてその後の教科書編集の基本的方向を確立したことを明らかにした。

（4）その方向は、戦後の占領下における教科書改革の方向によってさらに進められ、現代では言語活動を重視する方向が一層強化されており、今後は、言語生活の向上に寄与する言語活動教材を一層充実させる方向に進むことの可能性と必要性を明らかにした。

以下、より詳細に、本研究で明らかになった小学校国語科入門教材の明治以降の歴史と展望について述べる。

（5）明治初期の小学校国語入門教材は、『うひまなひ』（柳河春蔭編：1870 年）、『ちゑのいとぐち』（古川正雄著：1872 年）、『小学教授書』（文部省編・師範学校彫刻：1873 年）、『小学入門（甲号）』（文部省出版：1874 年）などにみられるように、「いろは」あるいは「あいうえお」順で仮名文字１字ずつを提示する教材が主流であり、文字→単語→語句→文という整然とした順序を取っている。当時の小学校入門教科書には、幕末から明治初期にかけて日本に強い影響を与えたと考えられる米国の教科書との類似点が多い。

（6）明治期検定制度発足と同時に文部省が模範教科書として発行した『読書入門』（よみかきにゅうもん：1886 年）は、単語によって文字提出を開始する方法としての単語法を確立し、その後我が国の入門用教科書が文字法に戻ることはなかった。

通説ではこの『読書入門』が我が国最初の単語法の教科書と言われてきたが、正しくは、それより７か月ほど前に出版された新保磐次著『日本読本初歩』が「メ」（目）という単語によって単語を提出した最初の教科書である。とは言え、「ハト」というような２文字単語によって文字提出を開始する方法としての単語法を採用した最初の教科書は、この『読書入門』である。しかも単語法を定着させたという点で、やはりこの『読書入門』は画期的である。

この方法は、今では「単語法」と呼ばれることが通常であるが、当時の日本教育界は米国よりもドイツからの影響が強くなっており、当時はドイツ語の Normalwoertermetode の訳語としての「範語法」という用語が用い

られることが多かった。

『読書入門』がドイツのボック教科書から影響を受けたことは編集当事者湯本武比古彦が「ドイツ人ボック氏のレーゼブッフに就き、その読書入門即ちフィーベルに関する趣旨目的及び教授法の部分の翻訳を、井沢局長に提出し」と証言していることから明らかであるが、その「ボック氏のレーゼブッフ」の「読書入門即ちフィーベル」そのものに当たって詳細に比較検討した研究はまだ発表されていない。

その現物を日本国内で入手することは困難であったが、今回のドイツ現地調査でその現物を見て、その全文を写真撮影してその複写を入手し、それと、湯本武比古が編集に深くかかわった『読書入門』との類似性を確認することができた。

その現物とは、エドゥアルト＝ボック著になる 1871 年初版発行の教科書『ドイツ語入門および低学年用読本』フェルディナント＝ヒアト出版社：Eduard Bock “ Deutsche Fibel und Lesebuch fuer untere Stufe” Verlag Ferdinand Hirt,1871）である。

『読書入門』は、「よみかきにゅうもん」という名称に象徴されるように、平仮名を読む学習と書く学習とを同時に始める方法、つまり、読み書き同時学習という方法を採用している。そのためこの教科書では、曲線が多い平仮名よりも、直線が多くて小学校入門期にある子どもにとってより書きやすいと考えられた片仮名によって文字提出を始めるという方法が採用されている。この方法がいわゆる「片仮名先習」法である。これによって、それまで論争的状況にあった平仮名・片仮名いずれを先に提出するかという議論に決着がついて、以後、太平洋戦争配線に至るまで、片仮名先習が踏襲された。この点も『読書入門』の歴史的特色である。

（7）1903 年には教科書検定制度が廃止されて教科書国定制度が成立した。翌年からは国定教科書が使われることになり、いわゆる国定第 1 期教科書である。その入門用国語教科書は『尋常小学読本巻一』（通称「イエスシ読本」：1903 年）である。その教科書は、「イ」（「イス」の「イ」）によって文字提出を始めている。これは、1 文字によって文字提出を行う文字法に回帰する方法を採用しているわけではなく、「イス」という単語によって語を提出する方法である。「イス」の「イ」と同ページに「エダ」（枝）の「エ」を提出して、「イ」と「エ」を混同する発音を矯正しようとする標準語音教育のための教材ともなっているのである。

これは当時「改良範語法」とも呼ばれている。次の第 2 期国定教科書の入門教科書『尋常小学読本巻一』（通称「ハタタコ読本」：1910 年）は、この方法を捨てて、再び 2 文字単語による単語法に戻っている。

（8）その次の第 3 期国定『尋常小学国語読本』（通称「ハナハト読本」：1917 年）もそれを踏襲したが、この間 2 回の改訂を経て、文の提出時期が徐々に早くなってきている。

（9）1932 年発行の第 4 期国定教科書の入門教科書は『小学国語読本巻一』（通称「サクラ読本」）であるが、この教科書は、単語ではなくて文（センテンス）によって文字提出を開始する方法としてのセンテンスメソッドを開始した最初の教科書である。

「サクラ読本」が子どもの言語経験を重視し、生活の中で発せられる子どもの発話から入門教材を開始する画期的な教科書であるということは、従来も指摘されていた。また、「サクラ読本」編集にあたっては、ドイツの入門教科書『ハンザフィーベル』（Otto Zimmermann “ Hansa-Fibel ” Georg Westermann Verlag, 1914:オットー＝ツィマーマン著、ゲオルク＝ヴェスターマン出版社）から大きな示唆を受けたことは、「サクラ読本」編集当事者の井上赳によって証言されていた。しかし、実際の『ハンザフィーベル』を研究対象に取り上げて、これを「サクラ読本」と比較考察する研究はこれまで発表されていない。

今回の研究では、ハンブルク学校博物館、ゲオルクエッカート国際教科書研究所、『ハンザフィーベル』を出版したヴェスターマン出版社古文書館への実地調査によって、関連資料の徹底調査と入手を達成して、精細な比較研究を実現した。

（10）井上赳の回想証言の細部にはいくつかの勘違いが認められるが、大筋において間違いがないということが確認され、その大筋にこそ、歴史的意義があるということが明らかになった。

新教科書編纂のための調査の使命をもって 1 年間に及ぶ欧米視察を行った井上赳が、ハンブルクにおいて『ハンザフィーベル』と衝撃的な出会いをしたことが、井上にセンテンスメソッドの教科書実現の具体的方法への示唆と勇気とを与えたことは確かであるが、その背後には、それ以前の教科書編集方針におけるセンテンス重視傾向増大の流れと、その方向を希求する教育界の思潮の高まりが背景にあり、さらには児童中心主義の世界的思潮がその背後にあったことも明らかになった。

『ハンザフィーベル』がドイツにおいてそれ以前の単語法を克服するところから誕生して、またたくまに広範な支持を受けたことと、「サクラ読本」がそれ以前の日本の単語法教科書を克服するところから誕生して熱狂的な支持を受け、それ以後の日本の入門教材の流れを決定づけたこととが、相似形のように対応することも明らかになった。

（11）本研究では、『ハンザフィーベル』の初版から各地方版や多数の改訂版に及んでそのすべてを網羅して収集保管しているヴェスターマン出版社の古文書館と、ハンブルク学校博物館の貴重書庫、およびゲオルクエッカート国際教科書研究所の蔵書650冊余に目を通して調べたが、井上赳が回想しているページとそっくり同じ挿絵やレイアウトのページが収録されている教科書が存在しないことを確認することができた。『ハンザフィーベル』について述べた井上の回想には、細部において記憶の変容が生じているということが確認できたわけである。

井上が収集した教科書が焼失したために、井上がこの教科書について著述する際に現物に照らして確認することができなかったという事情が、その原因の一つとして想定される。しかしそれは、井上の回想の信憑性をその根本において損なう結果にならない。

今回のドイツ現地調査によって『ハンザフィーベル』諸版の現物を確認しその全容を把握したうえで、井上の回想を吟味すると、細部におけるくいちがいはあっても、基本方向や全体の特徴という点では、本質をとらえており、その回想はほぼ正確であるということが、併せて確認できたことになる。

一言で言うと、井上赳が回想しているページとそっくり同じページはないが、ほぼ同一のページは確かにあるということが確認できたのである。

（12）「サクラ読本」の特色は、『ハンザフィーベル』と同様、児童の生活経験で発せられる自然な文を重視していることは、「サクラ読本」の冒頭文は「サクラガサイタ」であり、「ガ」が「カ」よりも先出させていることに対する論理主義者からの井上の反論からも明らかであり、これは、『ハンザフィーベル』を生んだハンブルクのオットーツィマーマンの基本姿勢と共通するものであることが明らかになった。

（13）本研究では、そのほか、欧米教科書調査旅行において井上赳が調査収集したであろう教科書を、ドイツ以外にも英米仏等の教科書を調査することを通して、米国教科書から土井いつ語句の反復を巧みに織り込んだリズミカルで物語性のある読み物を出すという点で米国の教科書から学んでおり、英国の教科書からは古典的作品を取り入れるという点で学んでいることを確認することができた。

井上赳が「カリフォルニアの州定読本」の「プレプリマー」を紹介する際に「この本はすべて焼失しましたが、この巻最初だけはよく記憶しています。」として紹介している部分があるが、それについて、米国で出版されている復刻と確認すると、細部に微妙な違いあることが認められる。が、その違いは、ただ一つの単語（The と A の違い）だけであって、他は正確に再現されているということも確認することができた。

（14）次の第5期国定教科書は、太平洋戦争開戦の年（1941年）発行であり、その国語科入門教科書は『ヨミカタ一』である。これもセンテンスメソッドによって編集されているが、文字の無い絵場面から始まっているところにその特色がある。これは、文字無し絵場面から始まる史上初の教科書として位置づけることができる。

この絵場面教材の配置の意図は、話しことば指導教材をもって入門教材を開始しようとしたところにあり、そこに、この教科書の特色がある。絵場面によって入門教材を開始する方法を仮に「絵場面法」と呼ぶならば、これは、史上初の「絵場面法」ということになる。

なお、別冊教科書『コトバノオケイコ』を姉妹編として使用するようにしたことも、この第五期国定教科書入門教材の特色である。

（15）国定最後となる第6国定教科書の小学1年生用は『こくご一』（通称「いいこ読本」：1947年）である。これは、連合国軍占領下の日本で出された国定教科書であり、米国の入門教科書の影響を強く受けている。

この教科書は、「みんないいこ」という詩によって入門教材を開始しており、一篇の詩によって国語入門を図る史上初の教科書である。詩によって国語入門を図る教科書という特色をとらえてこれを仮に「ポエムメソッド」と称するならば、これは史上初のポエムメソッドの試みであると位置づけることができる。

文字提出を開始するための言語単位を、文字や単語ではなくて、児童の生活の中での発話による文（センテンス）にするという「サクラ読本」が確立した基本的な方向を踏襲しつつも、その文を詩の中で提出しているという点が、この教科書の特色と言える。

1886年発行の『読書入門』以来長く継承されてきた「片仮名先習」を捨てて「平仮名先習」採用したのもこの教科書の大きな特色の一つである。国語教科書が「現代かなづかい」を採用したのも、これが最初である。言語生活をより重視する方向に進んだということができる。

（16）その後、1947年公布の学校教育法で教科書検定制が成立し、民間の検定教科書に対するモデルとして編集発行された国語教科書の小学1年生用教科書の3部構成（プレプリマー、プリマー、ファーストリーダー）のうちの「プレプリマー：pre-primer」に相当する教科書が『まことさんはなこさん』（1949年）である。奥付に英語で Approved by Ministry of Education と印刷されているのが占領下という当時の状況をほうふつとさ

せる。
　これには、米国の入門教科書からの影響が強く見られ、戦後日本の教育に強い影響力を発揮した連合国軍総司令部（ＧＨＱ）の民間情報教育局（ＣＩＥ）が日本に持ち込んだ米国の入門教科書との類似性が強い。これを米国の盲従とする批判もあるが、盲従と言うのは言い過ぎで、占領下にあって日本の独自性を生かそうとする苦労の産物であることが、当時日本側の編集責任者であった石森延男の証言と、近年になって公開されたＣＩＥ文書等を参照することによって、明らかになった。
　この入門教科書は、「まことさん」と「はなこさん」という二人の登場人物が展開するかなり長い物語になっている。絵本のように豊富なイラストの中で文字が提出されている。そのまま一冊の物語絵本のようになっているのである。
　その物語の中で、一語文を含む多くの文が、韻律のある文章の中で提出され、その中で、同一語句の繰り返しが多用されている。
　男女二人が主人公として登場する１冊の物語絵本のようになっている点は、米国の種々の入門教科書とそっくりである。文字の初出は、「一語文（holophrase)」によるが、それが反復提出される点がこの同教科書の特色である。その点も、ＣＩＥが日本に持ち込んだ米国の入門教科書との類似性が強い点である。
　ある程度の長さを持つ物語によって、国語入門教材とする方法は、「ストーリーメソッド（物語法)」と呼ばれることがあるが、その教材に果たす絵の役割の大きさを考慮すると、これは「絵物語法」と呼ぶほうが実態に近いと考えられる。
　「絵物語法」は、その後の検定教科書国語入門教材によって広く採用されてきて現代に及んでいる。時代を経るにしたがって、絵物語の長さが短くなってきて、今では、数場面程度の長さになっているが、文字提出を絵物語の中で開始するという方法はずっと継承されている。
（17）民間の検定教科書も 1949 年から使用され始め、1955 年頃までには十数社が検定教科書を出版。いずれも米国の入門教科書によく似ている。男女二人の子どもが登場する物語によって教材が提示されるという点や、同一語の反復が多い「絵物語法」を採用しているという点等において、すべての教科書が基本的に『まことさんはなこさん』に似た編集方法を採用している。
　これら多彩な検定教科書の中には、文字が最初に提出に出てくるまでに、たくさんの絵場面が続いているものがあったり、文の中で同一語句が反復して提出されたりしていて、それぞれに、それに類似する米国の教科書の存在を確認することができる。
　多彩に出版された検定国語教科書ではあるが、入門教材の冒頭から文字を出すか、文字の無い絵場面を多数出すかという状況の違いに着目すると、大きく二つのグループに分類される。前者は、“BUSY BETTY” （The University of Florida,1942 年）タイプであり、後者は、“Come and Ride”(The Macmillan Company,1945 年）タイプである。文字の読書きを開始するまでの準備期間「レディネス」（readiness）期間をどこまでにするかの違いがこの違いに表れていると考えられるが、その違いは米国の入門教科書にも表れているので、モデルにした米国の入門教科書の違いがそのまま反映した結果であるという可能性もある。
（18）戦後検定期初期の語形法の流行とその漸減傾向に致命的打撃を与えたのが検定を受けない教科書『もじのほん』(明星学園著、麦書房、1964 年）の出現を受けて、音声法を取り込んだ検定教科書が全盛になり、その後、2002 年使用開始の検定教科書から徐々に音声法の制約から脱した教材が出てくるようになった。
　その後、教科書は、絵物語から開始する方法をとりながらも、話し言葉や書き言葉における言語活動的要素を多様に含む言語活動教材の色彩を強めてきている。
（19）近年の特筆すべき出来事としては、ジャンボ名刺を作るという言語活動を提示する教材が出現した（2000 年）ことである。この教材では、言語活動の中で自分の名前の文字を書く学習を開始するという方法が採用されている。言わばこの教材は、全国共通教材で個に応じる指導を可能にした最初の教材である。その点でこの教材は画期的である。
　この教材や近年の各社教科書の改訂傾向を見ると、今後は、言語活動と個に応じることが一層充実する方向に進むであろうということが展望される。
（20）最近の検定教科書はどの社の教科書も、冒頭に絵物語ともいうべき数ページを置き、音声言語活動の中で読み教材としての平仮名文が提出されている。いずれも、子どもの言語生活や言語経験を重視し、子どもの自然な発話を重視する方向である。
　その方向を開拓して定着させたのは「サクラ読本」(1932 年）であるが、その方向はその後も継承され、さらにその傾向を強めるという一大潮流が今日まで続いており、今後さらにその方向への展開が進むであろうと推測される。
（21）子どもが生活する環境には、漢字仮名交り文が溢れており、子どもが生活の中で漢字を目にする経験は幼児期から豊富にあり、幼児が遊び書きする文字の中にも漢字が頻繁に表れるという事実を踏まえると、今後、

言語生活や言語経験との結びつきを一層強めるためには、小学校国語入門教材から、振り仮名付きの漢字仮名交じり文を提出する方向での研究開発が必要となる。それも、この研究が明らかにした今後の課題の一つである。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計５件）
① 首藤久義、単元学習における学習材―教科書を活用して縛られない、月刊国語教育研究、査読有、492 号、2013、4－9
② 首藤久義、就学前読み書き指導の基本原理、千葉大学教育学部研究紀要、査読無、61 巻、2013、255－262
③ 首藤久義、ハンブルクの出会い―小学国語読本誕生の機縁、2012、千葉大学国語科教育の会会報、査読無、2012、37 号、1
④ 首藤久義、書く活動を通して書く力を伸ばす、指導と評価、査読無、688 号、2012、13－15
⑤ 首藤久義、ハンザフィーベルと「サクラ読本」、千葉大学教育学部研究紀要、査読無、60 巻、2012、249－258

〔学会発表〕（計９件）
① 首藤久義、就学前読み書き指導の基本原理、日本国語教育学会千葉県支部平成 25 年研究大会・招待講演、2013・3・9（千葉大学・千葉市）
② 首藤久義、ハンブルクの出会い―小学国語読本誕生の機縁、千葉大学国語科教育の会平成 24 年研究大会・招待講演、2012・5・12（千葉大学・千葉市）
③ 首藤久義、読み書きの発達と学習支援のありかた―幼児期から小学校入門期にかけて、フレーベル館編集委員会・招待講演、2012・5・11（フレーベル館・東京都）
④ 首藤久義、『小学国語読本』に影響を与えたドイツの『ハンザフィーベル』、国語教育史学会第 50 回例会・招待講演、2011・10・15（早稲田大学・東京都）
⑤ 首藤久義、4 月から新しくなる国語教科書、千葉大学附属幼稚園平成 22 年度公開講座招待講演、2011 年・1・20（千葉大学・千葉市）
⑥ 首藤久義、就学前後の文字教育―保幼小の連携、ことば遊び研究会保育講座・招待講演、2011・1・14（鈴木出版社・東京都）
⑦ 首藤久義、「サクラ読本」とハンザフィーベル、日本読書学会第 55 回研究大会、単独発表、2011・8・6（全林野会館、東京都）
⑧ 首藤久義、場を作り個に即して書く力の育ちを助ける、文教大学国文学会第 20 回国語教育研究集会・招待講演、2010・8・28（文教大学・越谷市）
⑨ 首藤久義、できたてほやほやの国語教科書―小学校入門期、千葉県国公立幼稚園協会研修会・招待講演、2010・5・21（千葉大学・千葉市）

〔図書〕（計２件）
① 日本国語教育学会編（首藤久義他多数執筆）、国語教育総合辞典、朝倉書店、2011、870（642―643）
② 桑原隆、首藤久義他、国語単元学習の創造第 1 巻理論編、東洋館出版社、2010、307（126－143）

〔その他〕
ホームページ等

http://mitizane.ll.chiba-u.jp/metadb/up/AA11868267/13482084_60_249.pdf
http://mitizane.ll.chiba-u.jp/meta-bin/mt-pdetail.cgi?cd=00116193
http://ci.nii.ac.jp/naid/40019253078
http://www.geocities.jp/hisasyuto0817/index.html

６．研究組織
(1)研究代表者
首藤　久義（SHUTO HISAYOSHI）
千葉大学・教育学部・教授
研究者番号：２０１１３８９７